

---

恋

アンモビウム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
恋

【コード】  
N0049BA

【作者名】  
アンモビウム

【あらすじ】  
若き乙女の恋物語  
短編集

## 意地悪な星

クラスに友達が居ない暦6年。

大体、親しい友達はほかのクラスになってしまふ。

誰とも話すことなく私はただ本を読み続けていた。

今月は本を五冊読み終えることを目標に毎日、休み時間は本を読んでいる。

クラスでのあだ名は本さん。

本好きの本さん、その本なーに？

本好きの本さん、その本は面白いの？

本好きの本さん、あなたにはお友達はいないの？

そうやっていわれ続け早十一ヶ月。

「ねえ、君・・・あーいや、えっとー岸本さんだよね?」

彼は平野 聖也。

女子からの人気は圧倒的で学年一、いや、校内一モテる男として名が知られている。

もちろん、男子からも人気は高く、友達が多い。

私とは大違いだ。

「俺、平野 聖也！岸本……」

「岸本 あかり……です。」

私は眼鏡の位置を整える。

彼は私の眼鏡に興味を持ったらしい。

「ねねっ、その眼鏡、貸して！」

私からパツと眼鏡を取り上げ、自分に装着させてみる。

何をしても可愛く、かつこよく見える彼は私の眼鏡ひとつで皆の注目を集めた。

「何、聖也眼鏡かけてんのー？」

「モテる男がさらにモテたいっていつのかよ！」

軽く男子が椅子の上に立っている平野くんの背中をたたく。

平野くんはバランスを崩し、平野くんの背中が私の方へ迫ってくる。

眼鏡をかけていない私は前髪が被さり、よく前が見えなかった。

私のおでこと平野くんの背中がぶつかる瞬間。

やっと、平野くんが倒れてきたことに気がついた。

思いつきり、私は床に仰向けに倒れる。

少しずれて、平野くんも倒れる。

私が最後に見たのは、平野くんの時計に絡まってどこかへ飛んでいく髪ゴムだった。

「……もと……岸本さん!!」

私は急いで飛び起きる。

見ると、そこは保健室。

白いシーツの上に寝かされていたようだ。

「じめん、岸本さん。」

平野くんは手を合わせて誤る。

私は大丈夫だといったものの、かすかに頭が痛かった。

頭を強打したのかもしれない。

眼鏡がないため、平野くんなのかさえもよくわからなかった。

私は急いで眼鏡を探す。

平野くんが優しく、私に眼鏡をかけてくれた。

「あのさ、岸本さん……。」

平野くんは私のいるベッドに腰を下ろす。

私は話し始めようとする平野くんを見て、慌てて眼鏡をかける。

眼鏡をかけてから、驚いた。

こんなにも耳のへしよんとなっているわんこの様な姿の少年を見たことがない。

私は思わず、ぎゅっとした。

「き、岸本さん……?」

その声に、思わずハツとして、我に返った。



「あー、ありがとうございます。」

微笑んで、手の中のゴムをとろうとした。

「え？・・・あれ？」

そのゴムを取ろうとすると、平野くんは私にとらせないように、あっちこっちに手をぶらぶらさせる。

全然、取れない。

「あの、ゴム。返してくれるんじゃないんですか？」

私は平野くんの裾を引っ張っている。

「やだ。」

ん？

「俺さ、抱きつかれんの、好きじゃないんだよね。」

「・・・はい。」

「さっきさ、俺に抱きついたでしょ？」

「・・・だって、あんなしょぼーんしてた犬がいたら、ぎゅってしたくなるでしょう。」

「ぎゅ。」

私がいつことなんてお構いなしに手招きをする。

理由をいった私が恥ずかしくなるだけじゃない。

「ほえ？」

私の唇に柔らかいものがあたった。

「俺のファーストキス。」

え、何を突然言い出しているのか？この少年は。

「俺さ、岸本さん、気に入ったんだ。」

何か、おもちゃみたいな言い方……。

「俺の彼女になる気はない？」

・・・。

・・・。。。

・・・？。

この人は何をいつているんだ。

私が彼女？

校内一の人気者と？

まさかあー！。

んなわけないない。

何かの聞き間違えよ。

「ねえ。聞いてる？」

「はい？」

「俺の彼女。やだ？」

はあああああああああああ!?!?

「待ってください。私が彼女？あなたの？」

私は眼鏡の位置がずれるくらい、考えた。

「ねー。やなのー？」

甘えた声で聞く。

「いや、あの……。嫌ではないんですよ？」

否定はできない。

「じゃあ、彼女になってよ。はい。きーまり。」

え？

は？

何ですとー！？

「あの、私の意志、意見はどーした……。」

「さっき、抱きついたよね？俺、そのこと口が滑っていったらどうか

も。」

「その説はすみません。」

「いわれたくないでしょ？」

まさか。

「内緒にするから、今日からあかりちゃんが俺の彼女。ね？」

まさか、脅し交じりの告白ですか？

私、これから、この人とどう接すればいいんですか？

END

## 意地悪な星（後書き）

最初は爽やか少年を書こうかなーって思ってたんですけど  
最後は意地悪な子になってしまいました（笑）

岸本さんからあかりちゃん

あかりって呼ぶんじゃないかと

あかりちゃんって呼ぶところがポイントです（笑）

## 生成り色

生成り色とはすごくすごく薄い黄色。

白に近い黄色。

生成り色は不思議な色。

見る人によって白か黄色か。

ぱっと見、全く別の色として見られる。

熊石 生成とは。

現在、高校2年生の男。

いい子なのか悪い子なのか。

ぱっと見、どちらともいえない外見を持つ男。

春。

クラス換えが行われ、担任の福崎が一人ずつ自己紹介をする時間を設けた。

「僕、熊石 生成。好きな色は蛍光黄緑。」

それだけいって座る。

周りはざわめく。

こいつはいい奴なのか？

そういった不安、または疑問を持たせる奴。

「熊石、ここ解いてみる。」

数学の時間。

黒板に応用問題とチャレンジ問題が3問ずつ並べてある。

「できた！」

計6問の難しい問題を意図も簡単に解く。

「熊石、凄いなお前！全問正解じゃないか！」

先生を驚かせる。

何事もなかったかのように席に着く。

「熊石くん、この人物名は何でしょうか？」

歴史。

周りから見ればとても簡単な問題。

先生がちょっと笑いをとるために質問をする。

ちなみに答えは織田信長。

「お・・・お・・・おた・・・のぶ・・・」?

解けない。

先生は啞然とし、クラスメイトは笑う。

小野妹子のようなものだと考えているのか？

「熊石くん。起きてくださあい。」

小さな声と小柄な体格。

めがねをかくていかにも弱そうな音楽の先生。

奴は余裕で一番奥の一番端っこの窓側の席で眠りに付く。

先生は何回も奴を呼ぶ。

奴が先生を無視しているのか。

それとも気づかないだけなのかは誰も知らない。

なぜなら、奴は休み時間すべて、教室にいない。

どこを探してもきつと見つからないと思う。

授業の終わるチャイムとともに教室から去る。

授業の始まるチャイムの3分前にはいつの間にか席に着いている。

奴は変わっている。

「席替えをするぞー。」

月1で行われる席替え。

奴はそのそと歩いてくじを引く。

「熊石、何番だった？」

「僕は……3番。うげ。一番前の席だ。」

「お前、先生から四六時中監視されるな！」

奴はまるで今の席と一生の別れをするかのように席に着き、窓の外をじいつと見る。

奴は変わっている。

「僕、熊石 生成。」

奴は私の隣の席。

「君は？」

「三津 奈々子。」

「わあ！名前に3と7が入ってる！すごいすごい！」

奴は私の名前を馬鹿にするかのようにしゃべく。

「三津が隣なら、先生は安心だ」

何が先生は安心だ。だ。

私は成績も良くて態度も良い。

いわゆる優等生。

地毛が茶髪のせいで。

スカートがお下がりだからすごく短いせいで。

視力の低下は分かっているけど中々、めがねをかけさせてもらえないせいで。

私は染めているスカートの短い目つきの悪い不良生徒と思われる。

ただ、色々な事情が重なっているだけ。

それだけなのに。

「三津さんって、見た目以上にいい人だよね」

奴は私をじっと見ていう。

「どうも。」

昼休みになっても奴は教室にいた。

珍しい。

私は友達と一緒に食べる約束をしている。

屋上で、だ。

屋上は立ち入り禁止。

しかし、いつもなぜか開いている、と友達という。

私にだって友達の1人や2人はいる。

「奈々子ー。今、熊石くんの隣なんでしょ？いいなー。」

奴はモテる。

自覚はしていないようだが。

「奈々子、ごめん！彼氏から呼び出しくらったのー！ごめんねー！」

友達は私1人を残して去って行く。

どうせ、彼氏といちゃいちゃラブラブするのだろっ。

私は邪魔をしようとするような人ではない。

邪魔して何になるのだ。

と考えるような人なのだ。

彼氏いない暦3年。

中2のとき、ちょっとだけ付き合った男がいた。

付き合って2週間でキスより先にいこうとした。

私はそんな男と一緒にいたくないと別れた。

昼休みは長い。

ひたすら屋上で日向ぼっこ。

どこからともなく聞こえてくる曲。

「　　」

曲とともに聞こえてくる声。

どこかで聞いたことのある声だ。

入り口を挟んで丁度真後ろ。

奴がいた。

「あ。」

奴は私に気づく。

私は急いで逃げようとする。

奴に捕まった。

「今の、絶対に誰にもいうなよ！誰かにいったら……。」

そこまで聞くと、その先は大体分かった。

お決まりのパターン。

「分かった。誰にも言わない。」

私は奴の足元を横目でみながらいう。

靴下がえらい可愛い。

男はあんまり履かないような靴下。

奴の好きな黄緑。

そんな不恰好な靴下はどこに行けば手に入るのだろうか。

面白いくらいに不気味だ。

私はさっさと教室に戻る。

奴はやっぱりいない。

奴は変わっている、と思い出したのは去年のこと。

奴は隣のクラス。

奴の存在なんて気にしたこともなかった。

あの時まで。

高校1年生の夏休み。

私は一度だけ。

このときだけ、海の中で溺れた。

その日は、海に友達4人で来ていた。

4人とも、私のことを良く思わなかったらしく、私はいつの間にか。

いや、あっという間に置いてけぼりを食らった。

仲間はずし。

私はせっかく海に来たのだから、泳いで帰ろう。

そう思い、いつの間にか足のつかないところまで来ていた。

頬を伝う目から出る液体は海の一部と化していく。

足がつつた。

頭の中は焦りと悲しみと不安でいっぱいだった。

瞬時に、私は もう、死ぬのだろうか と考えた。

いや、ここで死んではいけない、と必死でもがいた。

海は遊ぶように私を下へ下へと引っ張る。

きつと、気を失ったのだろう。

目を覚ますと、そこは誰もいない海の家。

いるとしても、親父が1人だけ。

そよそよと吹く風。

私は扇風機の前にタオルケットをかぶせて寝かされていた。

「ねえ、大丈夫？」

間の前には奴がいた。

奴はゆっくりくつろいでいる。

「君、溺れてたんだよ。僕、助けたんだ。いい奴でしょ？」

奴は得意げにいう。

「ありがとう。」

そうやって海の家から出て行くこととした。

「どこ行くの?」

「帰るの。」

「友達はお母さんは?一人で来たの?」

「一人で来ちゃ悪い?」

「じゃあさ、僕と遊ぼうよ。」

「は?」

私は、水着から私服に着替えた。

奴と一緒に遊びに行かなければならないのだ。

街に出て、クレープを食べてアイスを食べて。

ゲームセンターへ行って奴は退屈していたが本屋に行つて。

街をうろつろ。

世間一般でいう、デート、をした。

何で合つて数分の奴と一緒にいなければいけないのだ。

今頃、家で涼んでいるはずなのに。

「元気でた？」

奴は笑顔いっぱいでいう。

「うん。」

私は少し微笑んでいう。

「じゃあ、ばいばい！僕ん家、こっちだから。」

奴はそういつて見えなくなる。

変な奴だ。

その後、何度か学校で見かけることが多くなった。

こっちが気にしても、あっちは気にしない。

友達からは奴のことが好きなんじゃないの？といわれた。

奴が好き？

ずっと目で追いかける。

気になる。

目が合うと、どきっとなる。

恋なのか？

END

## 生成り色（後書き）

少し変わった男の子を書きたかったんですね

生成り色って私的にはおとなしいってイメージがあるのですが  
そのイメージを、あえて、違う感じで想像したら、どうだろう  
そう思っただきたのが

生成くんです

## 眠る王子

菊竹 健太郎。

彼は私―野々村 穂乃―の席に座る、眠り王子。

「きーくーたーけくん」

休み時間になると、彼の机の周りは女子の塊になる。

私の席もちろん、犠牲になるわけで。

少々、へこみながら校内にある自動販売機でアイステイーを購入。

自動販売機から教室までの往復で、大体、休み時間は終わる。

私の休み時間は、何て寂しいものなのか。

友達も役員の仕事や、部活の用事で基本、いない。

帰宅部の私は暇しかない。

暇すぎて逆に忙しい。

そんな適当な言い訳を勝手に作ったりしている。

教室前の廊下で、女子がばらばらと自分のクラスに戻るのが見えた。

ぴったり。

我ながらすごいと思う。

「今日もいいタイミング。」

ポツリとつぶやく。

さっき買ったアイスティーは、そんな私へのご褒美だ。

「ご褒美なんかあげるから、菊竹くんは隣になって、少しずつ体重が増えていくのだ。」

「僕にも一口ちょうだい。甘いものなくて乾きそう。」

机に突っ伏しているはずの菊竹くんはこっちをじーっと見ながらいった。

「甘いものなら、そこに、いっぱい転がってるじゃん。」

私は菊竹くんの机にこんもりと載っているチョコやアメ、グミなどを見ていう。

「これ、僕の好きなものじゃないもん。」

それがほしいの。

菊竹くんは私が飲む間もずっと見る。

「わかった。あげる。はい。」

くれるの？と一瞬にして顔がぱあっと明るくなった。

私の中で菊竹のイメージががらんと変わった。

ただの突っかかりにくい人。

これがさっきまでのイメージ。

この人は、突っかかりにくい人ではなくて、本当は単純に出てきている人なのかもしれない。

みんながいう健ちゃんスマイル。

それは、今、私が見ているこのエンジェルスマイルのことだろうか。

彼のイメージが変わってからというもの、少しずつだが、打ち解け始めた。

話すようになったし、漫画の話で盛り上がることも多くなった。

しかし、近づけば近づくほど、気づくものがあった。

それは、彼が近くて遠い存在だということだ。

まぶしいほどの光を放つ星。

近くに見えてつかもつとするが、つかめない。

遠すぎる。

今の彼はそんな感じ。

いつも周りにかわいい子が集う菊竹くんと私ではもはや、生きる次元が違うのかもれない。

「野々村さーん？どうかしたのー？」

彼がとてつもなく甘えん坊だとうことが判明した。

お前は園児か！といたくなるほどの甘えっぷりだ。

「ん？何でもなし。少し考え事してただけ。」

私は菊竹くんの心配を振り切るように笑顔で答えた。

もちろん、隣では菊竹くんがまた、眠りの世界へ引き戻されていく。

うつうつとしながらも、寝るまいと目を大きくしてみたり。

見てたら可笑しくなってくる。

「……ふふふ。」

小声で笑う。

なんせ、只今、絶賛鬼教師授業中なのだから。

「何が可笑しいのー？」

半開きの目をしょぼしょぼさせて聞く。

何をしてもかわいい人はかわいいんだなと再確認。

「いっつも寝てばかりいるよね。」

「寝るのが僕の仕事……みたいな感じだからねー。」

だんだん、ぼわぼわしてきた菊竹くんは左右にゆらゆらした。

その行動が可笑しくてたまらない。

必死で笑いをこらえる。

しかし、その静かな笑いが先生に聞こえていたらしく、怒られた。

ついでに、菊竹くんと二人で廊下に立たされた。

廊下に出されたのをいいことに、菊竹くんは廊下の窓から脱出を計った。

廊下の窓から外までの高さは普通に行き来できるくらいの高さで

ある。

一階に教室があるのはいいことだ。

菊竹くんの後に続いて、校舎の裏にある草むらに来ていた。

こんなところ、あったんだ・・・と関心した。

「ここ、僕のオススメの日向ぼっこスポットなんだー。へへへ。」

草むらにごろんと横たわる菊竹くん。

私も座る。

風が心地よくて自然の涼しげな香りがする。

気持ちいい。

「わっ！」

私の太ももに頭を乗っけてくる菊竹くん。

「膝枕あゝ。」

ぼやんぼやんとした言い方で寝る姿はなんとも言いがたい愛くるしい姿だった。

「僕、こんなお嫁さんいたら、毎日幸せだろうなって思うなあ。」

「お嫁さん・・・ね。私もこういう人があいてだったら、毎日、癒されるだろうなって思う。」

・・・うわ。

うわあー。

私！  
何、今、菊竹くんにつられて恥ずかしいことしちゃってんの、

恥ずかしい、恥ずかしい。

今のはなかったことに……。

「あのね、僕、考えたんだ。野々村さん、僕のお嫁さんになってくれない？」

お嫁さん？

奥さん？

眠たくて、等々、寝言までいうようになったか。

「お嫁さんって、普通はお付き合いからはじめるんだよ。ここはちゃんと覚えといたほうがいいよ。」

いくら寝言といえど、付き合う前から結婚とかありえないから。

ちゃんと、正しいことを教えとかなくてはいけないからな。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

「それは、寝言ですか？」

私は一度、菊竹くんのほっぺをつねる。

「いひゃいよー！」

私は手を離す。

「何で、痛いことすんのさー。」

「寝言なら起こしてあげたほうがいいかなー、と。」

「寝言じゃない！本気！」

本気？

何で私と。

「僕、野々村さん……穂乃ちゃんが好き。」

照れるな。

h  
?

いや、待てよ自分。

照れる照れないの問題じゃなくて。

「本気で？」

「本気って言ったじゃんか。」

頬をさすりながらいう。

「え……えっと……ん？あれ……？えー？」

私はパニックに陥った。

「付き合う。私と君が。」

こくりこくりとうなずく菊竹くん。

「付き合って？」

甘えた声で菊竹くんはいう。

そんな声でいわれたら、Yesしか答えがないじゃん。

「わ、わかった。」

「本当!？」

わーいわーいとはしゃぎだす菊竹くんを前に、私は今、夢の中にいるのかどうなのか。

不思議な感覚にあった。

菊竹くんは好きだけど……。

好きだけど……？

この好きはどの好き？

私が思う菊竹くんへの気持ち。

ちゃんとした好きが見つかるといいな・・・。

END

## 眠る王子（後書き）

終わり方が微妙でした（汗）

変わった子、生成くんと同類になりますかね、健太郎くんも、穂乃ちゃん、アイスティー好きなんですよ。  
カフェとか大好きな子です。

あ、もちろん、この後、脱走した、と先生に長時間、起こられましたよ。  
この二人。

## 方言男子

漫画が好きで何が悪い。

漫画の中に出てくる王子様に出会えると信じて何が悪い。

「あーさーみー。」

加藤 麻美。

高校二年生。

私のベッドの周りには、寝る前に呼んだ漫画が散らばっている。漫画に囲まれて寝て、漫画に囲まれて起きる。

こうしていると、夢の中に素敵な王子様が出てきそうぞ。やめられない。

「姉ちゃん、早くしないと遅れるけどいいの?」

弟からそういわれ、時計を見る。

うわあ。

この時間に、こんなのにきに支度できた自分が勇者だと思えてきた。

「いってきまーす…！」

走った。

走って走って。

息切れが半端なかった。

教室に着いたのとほぼ同時にチャイムがなる。

ぎりぎりセーフ。

「麻美、今日、転校生来るんだって。」

後ろの席の子がいう。

「しかも、イケメンらしいよ。」

「転校生でイケメン？何、その定番なパターン。」

鞆を机の脇にかけ、漫画を取り出す。

「ここにきて漫画かよー。」

友達からは呆れられている。

いいの。

私は私の好きなこととして楽しんでんだから。

窓の外をぼーっと眺める。

雲がまだらに浮かんでる。

写真に残しておきたくなるほどの美しさだった。

「えー。今日は転校生を紹介したいと思う。」

担任の先生は転校生を呼ぶ。

入ってきたのは、確かに美形な男子生徒だった。

王子様……。

一瞬、そんなことを思った私は急いでそれをかき消す。

先生は彼に自己紹介をするようにという。

「結城 遥です。よろしくお願いします。」

あるあるな自己紹介をして、彼は私の隣の席に座るようにいわれた。

「結城です。よろしく。」

隣に座るや、律儀に挨拶をした。

「加藤です。」

体育のとき、先生側の都合上、男女一緒の場所でやることになった。

大人の都合とは、実に勝手なものだ。

男子はバスケ、女子はバレエ。

私はサボるため……、いや、一試合のみ出て、大活躍をした。

人数に決まりがあり、二人だけ、あまる。

そのあまりものが私と朝あつた友達。

二人で練習をするわけでもなく、壁にもたれ掛かり話す。

もちろん、漫画の話だ。

「今日の転校生がすごかったね。えっと、ゆ……ゆ……」

「結城くん？」

私は名前を思い出せそうで思い出せない友達に教えた。

「そっか！麻美は隣だもんね。」

羨ましいなーというばかりに輝いた目で見る。

あんな格好じゃ、麻美だって好きになるんじゃない？という。

「いや。私は結城くんを好きになることはない。」

私はじっとバスケットで走り回る結城くんを見ていう。

「何で。」

「だって、音痴だし。」

そっ。

さっきの音楽で驚異の音痴をみんなに披露していた。

私は寝ていたにもかかわらず、その音に目を覚ました。

とってもいい夢が一瞬にして悪夢に変わったのだから。

「許せん。」

ぼつりとつぶやく。

そういったのと同時にすうっと目の前の風景が薄れていくのを感じた。

闇の奥底に引きずりこまれていくような。

最後に聞こえたのは、友達が私の名前を呼ぶ声だった。

目が覚めたときには、そこは体育館ではなかった。

「目、さめた？」

ふと横を見ると、結城くんがいた。

「何でいるの。」

「保険係だから。」

そうだった。

保険係（病人を保健室に連れて行ったり、健康観察をしたり）だった……。

女の子のほうは今日、休みだし。

運悪い。

「ほんまあり得へん。」

後ろを向いて、小さな声でいった。

「結城くんって方言出るんだ。」

私の一言でびくつとした結城くん。

硬直した。

「今の、他の奴に……絶対にいうな。」

そういつと彼は静かに出て行った。

ほほおっ。

面白いことを聞いたな。

私はそう思うと、そっとベッドから降りて教室に向かった。

「麻美！」

教室に入るなり、女子に囲まれた。

え？は？何？

何、私、モテ期に突入か？

いや、でも、モテるなら相手は女子じゃなくて、男子がいいな。

「麻美、ちょっとおいで。」

腕をつかまれ、廊下に出される。

うわーこわっ。

女子の目が鬼になってますがな。

「結城くんに運ばれるとか、何者！？」

「何者って……？」

「しかも、お姫様抱っこ！」

姫様だっこ……！？

お、おら、お嫁に行けねーだあああああー！！

「ボールぶつかって！しかも、そのボール・・・ああもう！！」  
「いってることがごちゃごちゃです。」

「でも、麻美だから許すんだからね？」

そういうと、女子の皆様方は呆れ顔で教室に戻った。

わっつ？

友達曰く、結城くんが受け止められなかったボールが私に直撃。

受け止められなかったからだ、と責任を感じた結城くんは私を保  
健室まで運んだ。

お姫様抱っこで。

「つまり、あんたがどんくさいことを知ってるから許してくれたのよ。女子の皆様は。」

これを嬉しそうに話す友達はわついが連れられていく時、のんきにてを振っていた。

裏切り者め！

「そういわれると、バカにされてる気がする……………」

「バカにしてるもん。」

（ ; ）！！

その言葉で、私は広く浅く傷つきました。

「加藤さん。さっきのこと、誰にもいってないよね。」

落ち着いて席に着いたとき、隣の結城くんからいわれた。

「言うわけないじゃん。あんな面白い秘密は私の心の奥底にしまっ  
んです。」

「何か、それもやだな。」

呆れ顔でいう。

私って人を呆れ顔にする天才かもしれない。

きつと、このときの私の顔はにやけ顔だったと思う。

今日も逃げられた。

誰につて、友達に。

私の体育事件をのんきに語ったあのお方。

「私は、ゆつくり読書をしながら、昼食をとりたいたからついて来んな。」だって。

冷たいなーまったく。

学年一の才女は何を考えているかさっぱりですねー。

そんなことを顔に出しながら屋上まできた。

一人で食べるつつつたら屋上でしょ。

屋上のドアを開けると、気持ちの良い風が吹く。

いいですねー、屋上。

フェンスにもたれ掛かりながら、お弁当を開ける。

「今日も、アスパラ入ってる……。」

アスパラ、嫌い。

アスパラ、おいしくないし。

理由は自らの失敗。

これが、自業自得というやつか……。

「誰か、アスパラ食べてくんないかなー。」

一人でぼつりとつぶやく。

あー寂しい。

「俺が食つてやるか？」

「なっ！」

目の前に現れたのは、結城くん。

「一人で弁当とか、もしして、お前友達おらんのか？」

「いーまーすー！」

私は結城くんを睨み付ける。

結城くんは相変わらずの王子様スマイルでじっと見る。

こんなきらきらした笑顔見せられたら、食べずらい。

「何よ。」

結城くんは口をかぱっと開けて私を見る。

「アスパラ、くれへんの？」

あげない、とそっぽを向く。

「どーせ、くれんくても嫌いなもん残して、母ちゃんに怒られるだけやる。かわいそうになー。」

うっ。

「何や、凶星かいな。」

こいつは要注意人物と今、見なした。

「じゃあ、あげる。」

そんな風にいわれたら、ちょっとムカつく。

お弁当を差し出した。

結城くんは口をあける。

何、と聞くとあーんしてくれらんとちゃうの？と当たり前のように

にいった。

「はあ!?!」

あーんとか誰にもやったことないし!

あ、弟にはあるか。

でも、家族だけだし。

ふざけてんの!?!

「はよお、くれ。」

ぐいっと顔を近づけて目をつぶる。

私は少々、頬を赤らめながら彼の口の中にアスパラを入れた。

ほんま、うまいのおー、何て嬉しそうに食べる。

王子様から、美人な猫みたいに見えてきた。

「好き。」

ふいに彼の口から出た言葉。

「は!?!」

「お前の弁当のアスパラの味。俺、めっちゃ好きやわー。」

あ、ああ、アスパラね。

一瞬、どきっとしたじゃん。

・・・って、何で？

何で、どきっとするの？

「何や、お前のこと好きっちゅーたと思ったんか？」

私は戸惑いながらも素直にうなずいた。

次の瞬間、私の唇に何かやわらかいものが触れた。

はっと、気づくと、結城くんがこういった。

「お前のことも好きやで、麻美。」

私の頭の中は真っ白になった。

私のファーストキスが。

お前のことも好きって友達として？

キスも、誰にでもすることなの？

私の中に様々な感情が混ざる。

体中が燃え上がるように熱い。

結城くんは私に背を向けて、屋上から出て行く。

「返事は、今度、聞きに行くからな。覚悟しときー。」

そういつて。

END

## 方言男子（後書き）

関西弁、難しい・・・。

途中から、結城くんのキャラがわからなくなってきた（笑）  
麻美ちゃん、面白い友達持ってますよね。

爽やかな風

夏、隣にお金持ちの息子が引っ越してきた。

名前は赤根 翼。

ピンポン

夏休みの初日、朝早くからインターホンが鳴った。

私は初日くらいゆっくり休もうとこの時間はぐっすり寝ていた。

「優ちゃん、出てー。」

母から無理やり起こされる。

佐々野 優、今年で中学二年生に無事、進級。

「優ちゃん!」

眠気でふらふら歩く。

母から怒声を浴び、面倒くさいだのなんだのいいながらドアを開けた。

「隣に引越してきた赤根です。」

この人こそ、同い年ながら、私の運命を大きく変えた人なのだ。

「これ、つまらない物ですが。」

お決まりのセリフをこつも爽やかにさらっといわれると、意味のわからないトキメキが起こる。

「はあ。ありがとうございます。」

受け取ると、嬉しそうに微笑む。

本物の天使には羽がないんだな。

そう確信した瞬間だったのかもしれない。

「佐々野……。」

あなたの名前は？とでも聞くように首をかしげる。

「佐々野 優です。」

「僕、赤根 翼です。」

このときは、私服だったために私より年上に見えた。

「では。」

そういつて、赤根さんは一礼して去っていった。

「あら、優ちゃん。今日は何か学校行事、あったっけ？」

昨日の夜に学校から一本の電話があった。

生徒会は至急、集まるように。なんて、担当の先生からいわれたら、行くしかない。

「生徒会でちよつと。行ってきまーす！」

朝、いつもより少し遅く起きてしまった。

そのせいで、走らなければいけないはめに……。

こんな暑い中、やっちゃったなー。

「あれ？優さん。今から、学校ですか？」

隣を涼しそうに自転車で走ってきた赤根さん。

優さんって……。

「はい。生徒会で呼ばれました。赤根さんこそ、こんな朝早くに何しに行くんですか？」

「僕は転入先の学校の校内探検をさせただけだと聞いたので。どこの制服ですか？」

赤根さんも制服。

しかも、見たことない制服。

高校生？

私はそう思った。

「×中です。」

「あ、そうなんですか？じゃ、乗って行きます？」

赤根さんは走る私より少し先に自転車を止め、どろどろ、といった。

自転車二人乗りですか。

危なくないですか。

先生に見つかったら。

あ、でも、徒歩よりは遙に早い。

「すみません。あの、中学まで道、わかるんですか？」

「いいえ。教えてください。」

「本当、大変なことまで爽やかにさらっといっちゃっ赤根さんはすごい。」

自転車は風が涼しくて、気持ち上がる。

それにつられて、赤根さんとの会話も弾んだ。

赤根さんは同い年らしい。

赤根さんは私と同じ中学に転入してくるらしい。

学校着く 校内案内係 夏休み翼に勉強教えてもらう 好き ち

Φ  
I  
E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0049ba/>

---

恋

2012年1月4日02時46分発行